

透析医のひとりごと

「回想」

久木田和丘

いつの間にかこんな事を書く時期になったんですね。熊本県の田舎に生まれて、その後、京都の田舎で過ごし、20歳で札幌に来たのです。大学を何とか卒業して医者免許をいただいたのが昭和49年、友人と二人で室蘭日鋼病院に実習でしょうが、勤務になりました。内科と外科をやるつもりでしたが結局外科に居座りました。外科というのは心臓血管外科や脳外科の格好いいテレビ放送を見た影響ですね。当時、日本列島改造論の田中角栄首相の時代でそれまで月3万円で暮らしていたものが、新米医師の給料が20万円以上で先輩医師にえらい給料だなと言われておりました。ちょっと仕事のお手伝いをしてえらい給料をはでに使うと、キャバレーなんぞにも行ってもみました。判ったのは指名が大変で、それをコロコロ代えると睨まれることでした。

その間、北大の第一外科に入局し、昭和51年に岩見沢市立病院に転勤となりました。虫垂炎と胃切をやれば良いもんだと思っていたところ、当時、大平整爾先生が岩見沢市立病院におられ、透析という治療法がありそれも外科でやられておりました。訳も分からずお手伝い様の事をしておりましたが、ちょうどバスキュラーアクセスは外シャントから内シャントへの移行期でありました。外シャントは閉塞したら夜でも血栓除去を行うことになっており、外科医、私も含めて4人が夜間手当をいただき担当しておりました。ショッキングだったのは看護婦さんの話で、その頃は骨粗鬆症も強度だったんでしょう、お婆ちゃんがトイレから立ち上がろうとして、大腿骨骨折をしたとか、強度の水分制限のため水洗トイレの水を飲んだとかセミプロの医者には複雑な思いがありました。

しかしここで大平先生はまだ免疫抑制剤がステロイドとイムランしかない時代に、果敢にも腎移植を行われて学問とその実践を行われておりました。当時、岩見沢市立病院には札幌からも透析の依頼があり、北海道透析地帯のメッカという雰囲気でした。大学生で定期透析をしていた青年もおりまして滝川での結婚式にも出席した記憶がありますが、彼は透析についてもすごく勉強しており、水をあまり摂ったらダメだよと言ったら先生、体重が増えるのは水だけじゃないよと言り返されました。たぶん塩分の事を言われたのだと思います。仕事では自宅での開業もし、透析は長時間透析、在宅透析を経て腎移植も受けまもなく透析開始後50年近くになるようです。慢性腎不全治療の良い実践派でした。

その後、大学で数年の研修を経て昭和60年に札幌北楡病院の開祖川村明夫先生に誘われました。今、考えると拾われたように思います。そして外科と透析の二足の草鞋を履くことになりました。今は消化器チームと透析チームにゆるくグループ分けされ、もっぱら透析業務にあたっております。岩見沢で最初の論文ら

しき物を書かせてもらったのがシャント再建についてだったと思います。バスキュラーアクセスも他の疾患と同様に切った張ったばかりではなく、頭を使い考える必要があります。最近人工血管の感染さらにそこから出血の症例も紹介を受け、時に緊急手術となりました。大出血例の血液型がRh（-）だったこともあり、たかがシャントされどシャントと先人の言われた言葉を思い出しました。年間120万人もの人が受けているという白内障の手術で視力は回復し、アルコール摂取は多いもの手はまだ震えず、バスキュラーアクセスに対応可の状況です。一生懸命の一生は難しいかと思いますが一所懸命は何とかなるかと思う今日この頃であります。

札幌北楡病院（北海道）